

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



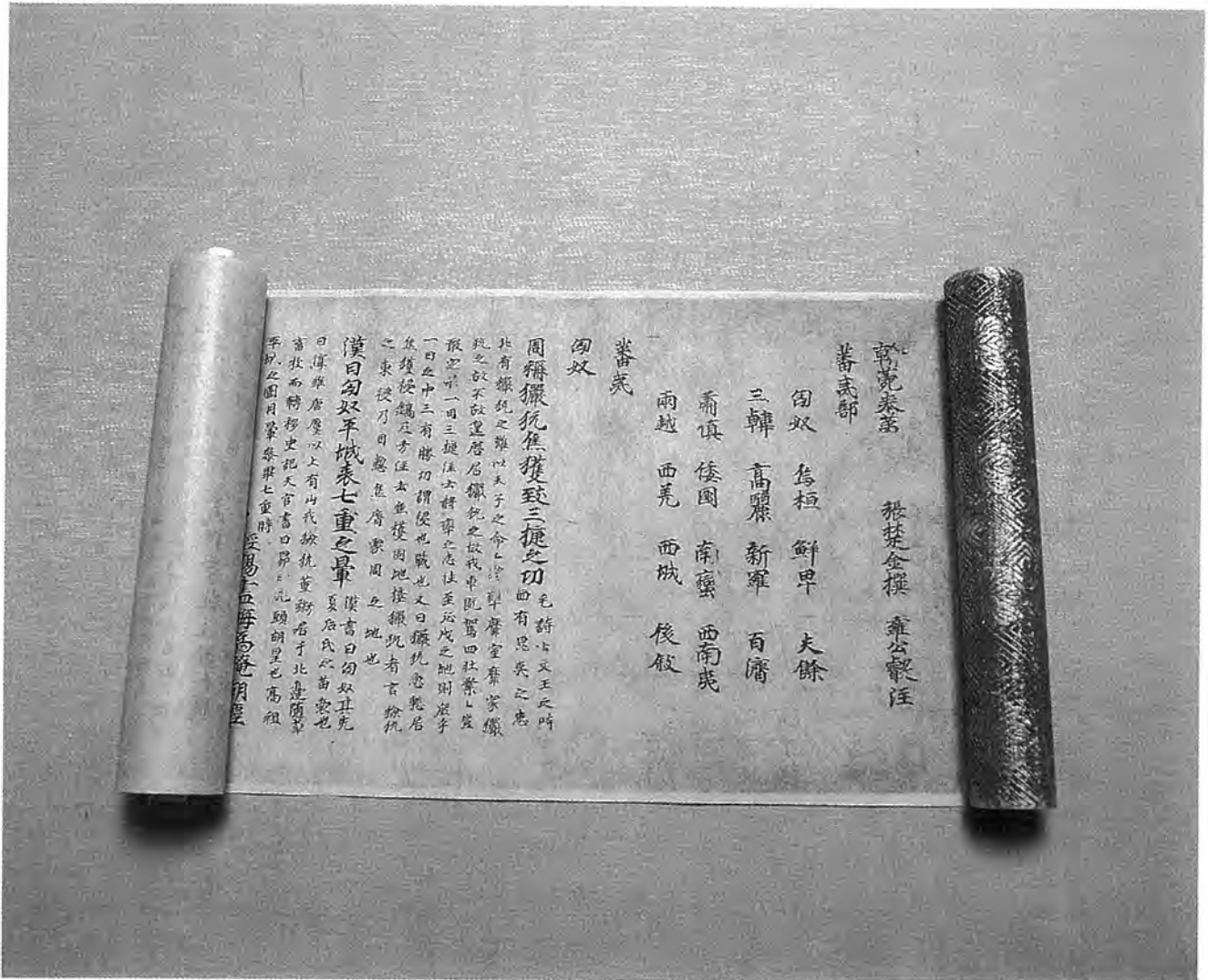
太宰府の文化財 ①

とほつびしゃもんでん
兜跋毘沙門天像 (重要文化財)

クスノ二木造 像高二六〇センチ
平安時代初期 観世音寺蔵
七四二年、西域兜跋国(トルファンのことか)安西城が包圍された時、毘沙門天が楼門にあらわれ

て敵を駆逐したという。地天の両手に支えられて立つ毘沙門天をよくに兜跋毘沙門天といい、国都の楼門にこの像を安置し王城鎮護の本尊とすることが、唐時代盛行し、日本にもこの考え方が輸入された。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財

②

翰苑卷州一卷 (国宝)

張楚金撰雍公叡注「翰苑」抄本

平安時代初期 太宰府天満宮蔵

市にある国宝二つのうちのひとつ。

唐時代(六六〇)に書かれ、全三十巻で、百科事典のような内容をもっています。我が国には平安時代初期に伝わり、日本や朝鮮半島など中国周辺の国々のことを書いた一巻だけが現存しています。邪馬台国や聖徳太子制定の冠位十二階の記述があり、古代史研究の貴重な資料です。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ③

木造阿弥陀如来坐像
〔重要文化財〕

クスの寄木造 像高二〇センチ
平安時代後期 観世音寺蔵

金堂の本尊であったこの阿弥陀如来は、西方極楽浄土において、一切の衆生（生物）を救うという仏

様です。平安時代末の文書に残る仏様と思われ、度々災難にあったらしく修理された部分が多くあります。また元禄二年（江戸時代）と書いた修理の記録と阿弥陀経十巻が像の体内から発見されました。



題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財

④

木造四天王立像

〈重要文化財〉



増長天(南)
〈像高二百三十四センチ〉



持国天(東)
〈像高二百三十六センチ〉



広目天(西)
〈像高二百二十四センチ〉



多聞天(北)
〈像高二百二十六センチ〉

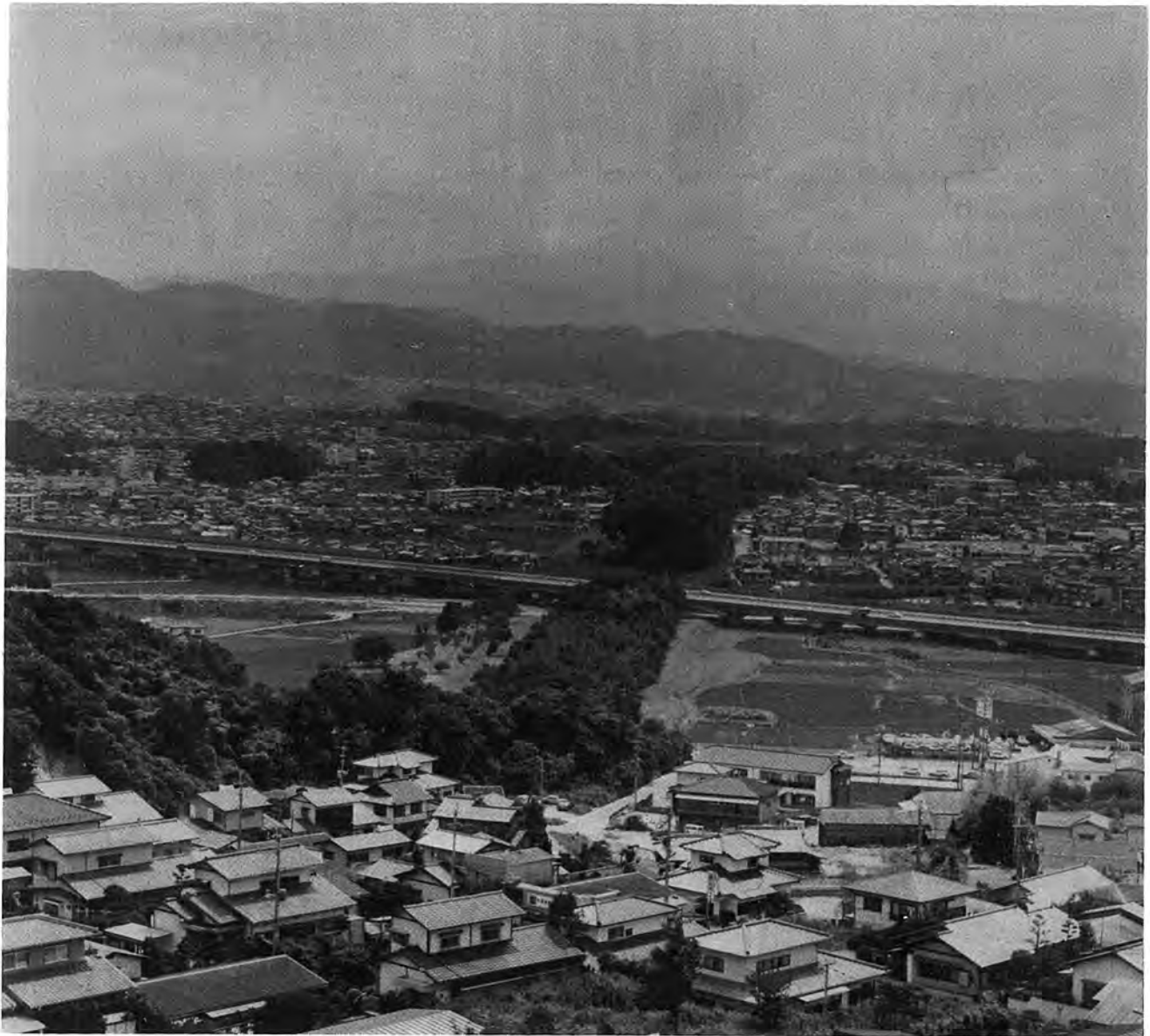
クスの一木造
平安時代末期

観世音寺蔵

前回の阿弥陀如来坐像の四隅に安置されている仏像です。須弥山

(世界の中心にあるという山)の中腹に住み、仏法を守る神々です。甲をつけ、悪神(邪鬼)を踏みつけて、仏法を害するものに怒りの表情を見せる四天王は、各東西南北の四方を守っています。二二をこす大像は珍しいものです。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財

⑤

水城跡（国特別史跡）

土塁 全長一、二〇〇呎

基部幅約八十呎

高さ約十三呎

濠 幅六十呎 深四呎

大宰府政庁の西北に横たわる水城は、六六四年新羅の来襲に備えて、博多側を塞ぐために築かれたものです。『日本書紀』の記事どおり、土塁前面（博多側）に堀を設け水を貯えていたことが発掘によつてわかりました。

版築という土をつき固めていく工法で土塁を築き、その下を横断する木製の溝（木樋）は水を堀に導くためのものです。一、三〇〇年前の人が設計したとは思えない程精巧な仕組みを持っています。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財

⑥

木造十一面観音立像

〈重要文化財〉

ヒノキの一本造

(像高四百九十八センチ)

平安時代中期 観世音寺蔵

やさしい顔、恐ろしい顔など頭上の十一面に様々な功德を表わす

この観音様は、延久元年(1189)七月に造られました。胎内（はらうち）に残る結縁者（むすびゆかり）の名前からこの像は多くの人々の浄財（じやうさい）によって造られ、また江戸時代には博多商人浦了（うらたつ）無（む）によって修理されるなど、信仰の人々に支えられ今日に至っています。



市政だより

太宰府

NO. 344

S60 10.15

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財

⑦

木造十一面観音立像（重要文化財）

寄木造 像高百三寸 光背あり

平安末期 観世音寺蔵

他の諸像とは少し感じを異にする像で、客仏であったと考えられます。雲をデザイン化した光背など珍しい造り、印象の仏様です。

木造十一面観音立像（重要文化財）

ヒノキの寄木造 像高三百三寸

鎌倉中期（仁治三年） 観世音寺蔵

観世音寺には、十一面観音様が三体现存していますが、この観音様が一番新しく、前号の観音様に対して新十一面とよばれています。初めの像が傷んだので新しく造り直したとの記録が残っています。



市政だより

太宰府

NO. 346

S60

11.15

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の 文化財⑧

鬼瓦 〈重要文化財〉

全長47.1釐 最上部幅33.8釐
奈良時代前半 大田寅人蔵

カッと見開いた目、逆立つ髪、恐ろしい形相は大宰府を害するものを一歩たりとも近づけない気迫に満ちています。屋根の大棟・降棟の端を飾る鬼瓦は魔よけの意味を持っています。この瓦も政庁の屋根の上から辺りをにらんでいたことでしょう。源流は新羅（今の韓国）に求めることができますが、この瓦のように真に迫る怒りの形相は他になく大宰府文化のシンボルとなっています。



市政だより

太宰府

NO. 348

S60

12.15

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財

⑨

志賀社（重要文化財）

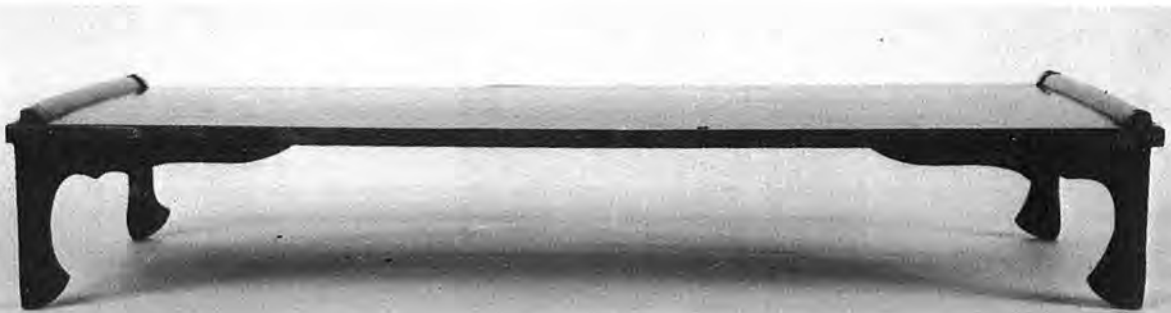


室町時代末期 太宰府天満宮

心字池に架かる朱の太鼓橋を渡り、二つめの太鼓橋にかかろうとする右側にこの社はひっそり建っています。航海安全の守り神、綿津見三神が祭られるこの社に、海

外貿易盛んなりし往時が偲ばれます。入母屋造りの屋根に千鳥破風、軒唐破風をつけた社殿は、軒を支える臺股などの彫刻物に残る彩色の跡から、当時の美しさが想像されます。初詣の折、ちよつと足を止めてみませんか。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



真上と側面から見た梅月蒔絵文台

太宰府の

文化財

⑩

梅月蒔絵文台

(重要文化財)

縦三十三・九センチ 横五十八センチ

高さ九・四センチ 室町時代

太宰府天満宮蔵

文台は歌会や連歌、俳諧などの席で懐紙や短冊を置いた小机です。黒漆地に、天神様ゆかりの梅と松を金泥で描いたこの文台は、室町時代の数少ない蒔絵品です。裏面に書かれた「信元」の花押から一五二八年～一五四四年まで天満宮留守職を務めた小鳥居信元の所有であったことがわかります。鎌倉後期から盛んになった連歌は、天神様をその道の神と仰ぐようになり、太宰府でも度々連歌の会が催されました。その度にこの文台も活躍したことでしょう。